

II 明日の風



大阪大学
ラジオアイソトープ総合センター

教授 山本幸佳

“Tomorrow is another day!”は、映画「風と共に去りぬ」のラストシーンでスカレットが天を仰いで力強く叫んだセリフである。確か、そのときの字幕には“明日に希望を託して！”と出たように記憶している。レット・バトラーにも去られて再出発を期す彼女の心情をズバリ言い表した名訳で、作者ミッチェルもこの訳には満足したであろう。この言葉が結構気に入って時々使ったりしていたが、後になって念のため辞書(岩波英和大辞典)をひも(紐)解いてみると、何と“明日は明日の風が吹く”と訳してあった。この訳それ自体には、あの印象的なシーンがなければ、正に言い得て妙、なるほどと感心させられた。同じ言葉がその使う場面によって異なるニュアンスを持つのは当然であるが、この二つの名訳には雲泥の差があるように思われる。前者には未来志向型の攻めの姿勢があり、後者には東洋的自然観に基づく待ちの姿勢、やや楽観的な人生観が伺える。しかし、どう考えても、あの印象的な場面でスカレットが石原裕次郎ばりに“明日は明日の風が吹かー”とうそぶいたのでは、折角の名画が台なしになってしまう。

ところで話は飛躍するが、原子力にとっては“Tomorrow is another day!”なのであろうか。もしそうであるなら、どちらの訳がふさわしいのだろうか。少なくとも学生時代に光輝く明日を夢見て原子力の世界に飛び込んだ世代にとっては、この30年ほどの間にその光が消え失せて明日が見えなくなってしまった状況だが、それでもその明日に希望を託してきたつもりである。しかし、21世紀初頭も原子力にとって冬の時代であることに変わりはない。高速増殖炉の再開は無論のこと、プルサーマル計画でさえもなかなか進展を見せない。ましてや、原子力発電所の新設などは現状では不可能に近い。力強く叫べば叫ぶほど逆効果をもたらしているようである。力強く叫ぶことにもそろそろ疲れてきた。ここは一つ頭を低くして、今日の逆風をやり過ごし、慌てず騒がず東洋流に明日吹くかもしれない順風を待つしかないのだろうか。

原子力産業の低迷と世間の風の冷たさが若者たちに敏感

に反映し、理工系学部の学生が最終進路を選ぶ際に、原子力を第一志望にする者が激減してしまっている。この現状は、何とかしなければ、原子力関連技術の伝承という面からも大問題である。成熟した原子力が今なお興味を持てる学問分野であることを学生たちに示さなければならない。

原子炉本体は冬の時代であっても、原子炉周辺計装機器はまだまだ発展の余地はある。ここ10年ほどの放射線計測器の進歩は目覚ましいものがあり、ソフト面は無論のこと、ハード面でも光ファイバ、常温半導体素子、輝尽性発光素子などが次々と放射線計測技術に取り入れられるようになって、小型・軽量・安価というメリットばかりでなく、不可能と思われていた計測までが可能になり、原子力関連分野に大きく貢献しつつある。その辺の現状を把握し、少なくとも専門家集団の間での心強い共通認識を持つために、原子力学会の中に筆者が主査となって“原子力・放射線施設計装技術の高度化”研究専門委員会を設けて、平成10年から情報収集等の活動を続けている。その中でも話題を呼んだ代表的な技術の幾つかがこの特集にもまとめられている。三菱電機の放射線計測技術の水準の高さと先端技術への挑戦意欲を示すものである。

原子炉本体の産業に再び春風が吹くまでその技術は温存しつつ、原子炉計装技術の高度化と、その成果の加速器や核融合実験装置周辺、さらには医療関係への応用という具合にすそ(裾)野を広げていく努力も必要であることは言うまでもない。風向きを変えることは抵抗も大きくエネルギーを消耗するが、さりとて風まかせではらち(埒)が明かない。やはり明日に順風を呼び込むべく、その通路の整備を怠ってはなるまい。

“Tomorrow is another day!”は単純ではあるが奥深い言葉である。状況や時代背景に応じてそのニュアンスが変わる。今の原子力にとっては、風に例えるよりも、新潮文庫の訳“明日はまた明日の陽が照るのだ！”とした方が若手研究者にも期待感を抱かせることになるのかもしれない。